

ハワイ大学 2014 Summer Medical Education

Institute Student Workshop 報告書 # 1

今回のハワイ大学臨床推論ワークショップに参加させていただき、ハワイ大学、日本の他大学の素晴らしい方々と知り合えたことが何より幸せでした。また、自分の理想の医師像、すなわち最も大きな目標をはっきりさせることができ、参加できたことをうれしく思います。ワークショップ中に私自身が体験したこと、感じたことをここにご報告させていただきます。

ワークショップのメインはPBL、診察の練習でした。

PBLでは、普段のPBLと異なり、予習なしで与えられた症例について皆で考えました。ある程度の鑑別疾患を挙げることはできたものの、詳しく説明しようとしたときに英語で伝えることが難しいこともあり、悔しくもありました。普段のPBLと異なる点は他にもあり、症例について与えられる情報は数ページにわたるのですが、そのページごとに**Learning issues**を挙げました。**Learning issue**を挙げる際、ハワイ大学の学生が、そのページにあるキーワードを一つ一つ丁寧に拾い上げていたのはとても印象に残っています。一つ一つ自らが使える知識として身につけているか確認し、あいまいならもう一度勉強しようと言って、その症例を通してできるだけ多くのことを吸収しようという向上心の高さが感じられました。さらに、まるで自分が症例の患者さんの主治医であるかのように**Need to know**を挙げ、検査、治療方法、患者さんへの伝え方なども具体的に見解を述べていました。知識量の豊富さ、真剣さも感じられました。ハワイ大学の学生に普段PBLがない日は何をしているのか尋ねたところ、**Learning issue**の勉強、資料作り、PBLの復習をしていて、その勉強時間は平均で12時間だと話していました。PBLの授業が始まる3年生の最初の時期に、小田先生がPBLは真剣に勉強すれば大きな力をつけられるとおっしゃっていましたが、ハワイ大学の学生の姿を見てわかったような気がします。今の私と彼らとの診断力、自己学習力の差を感じました。

診察の練習時間では、肺、心臓の診察、そして注射の練習をしました。肺の診察は日本と異なるところもありましたが、ペアを組んだ相手と話し合いながらできるようになりました。注射の練習時は本当に緊張しましたが、他大学の5年生の方にもコツを教えていただきながらできました。今回のワークショップで経験できてよかったです。

今回私がこのワークショップに参加したいと思った理由の一つに、自分の理想とする医師像をはっきりとさせたかったため、というものもありました。「いい医師になりたい。で

もいい医師とは何か」大学に入学した後で医師という仕事の実際を知ったり、そのために医師という職業に対して見方が変わったりして、漠然とした像はあっても納得できる言葉が見つからなくなり、イメージを描くことができなくなっていると感じていたのです。しかし、ワークショップ中にアメリカの医学教育についてお話を聞く機会があり、その中で私の悩みは解決しました。

アメリカの医学教育で掲げられている目標は 1.技能を含め、よりよい患者さんへのケアができること 2.医学知識が身につけていること 3.症例をもとに学び、改善できる力を身につけること 4.コミュニケーションスキルを身につけること 5.プロ意識をもつこと 6.体系化した診断ができること と定められています。これらの言葉を聞いたとき、私がまさに表現しなかった言葉だと感動しました。私自身の中で理想の医師像の基盤がはっきりしたように思います。アメリカでの医師国家試験にあたるものも、これらの目標が達成されているかわかるように作られているそうです。実際、患者さんとコミュニケーションがとれているかをチェックするために、患者さんの隣の家の飼い犬の名前を問われた学生もいるそうです。また、ハワイ大学の学生はこれらの目標と今の自分との距離を常に見ているように思います。だからこそ診断力や自己学習力が高かったのだと思います。

ここまでハワイ大学の学生について話をさせていただきましたが、他の日本の大学生も素晴らしかったです。ある大学ではこのワークショップのために、ワークショップの 2 カ月ほど前から週に 1 回参加者全員で集まって勉強会を開いていたと聞きました。ほかの大学ではワークショップ参加応募の倍率が 10 倍だったそうです。ワークショップに参加していた人たちのモチベーションの高さに刺激をもらいました。さらに自分を向上させたいという想いが強くなりました。帰国後、私自身の勉強に対する姿勢を見直しました。大学では、PBL だけでなく講義を受けることができます。講義では知識を身につけること、PBL では自分が本当に主治医になったつもりでその患者さんにどのように対応すべきか考えることを大切にしたいと思います。今まで自分に医師としての力が身につけているか自信がなかった原因は、目標をはっきりさせていなかったからだと気づくことができました。私はまだまだ力不足ですが、日々努力し邁進したいと思います。

最後に、今回のワークショップに参加させていただき心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

ハワイ大学 2014 Summer Medical Education

Institute Student Workshop 報告書 # 2

はじめに、今回のワークショップ参加のために色々ご尽力いただきありがとうございます。おかげさまで無事実習に参加できたとともに、財政的観点からも負担が軽くすみました。

今回は、ほかの三名と違い自分は別の航空会社にしたこと、および、軍事演習が上海空港において急遽開催されたことで上海に一泊し、ハワイに一日遅れで到着したことがほかの三名および事前の報告内容と変更になっている部分です。ご迷惑をおかけしましてすいませんでした。

ハワイ大学におきまして自身が学んだことは二点あります。

まず、実践中心型の授業であること。

次に、医学部の入試形態に性格(特性)が考慮されていること。

まず、一点目の実践中心型の授業とは、

日本では、講義で触れてから PBL・TBL 等の問題基盤型学習に取り組んだり、あるいはそうでなくとも終了後に解説等があります。また、少なくとも佐賀大学においては臓器別の授業に分かれており、PBL の症例を渡された時点で大体どこの範囲の病気であると推測できます。

しかし、ハワイ大学においては範囲がどうやら決まっていならしく、さまざまな疾患を想定しなくてはならない点が違うと思われまます。

今回の PBL において自分はほぼ範囲として呼吸器と循環器を想定してました。(循環器はあまりできなかったのですが)しかしながら、当該実習においてはそれ以外の分野もあげなくてはならず、その点において、自身の学習の仕方が不足していると感じました。それに、改めて気づくことができよかったですと思います。地域医療においては自分ひとりで判断し対処しなければならない場面が多く存在すると考えられることから、このように普段から多面的に物事を考えるという思考プロセスは大変重要であると痛感させられました。このできごとを地域医療に従事する際の糧としていきたいと思ひます。

また、今回の実習において筋肉注射および皮下注射を実際に行いました。自分の場合は大阪医科大学の学生さんとペアになって行いました。自分は三年なのでしたことがないのははじめは人形とかではなくいきなり人間にやらされました。このような経験は日本ではあまりないのではないかと思います。おそらく、OSCE 以降臨床実習に入ってからこのような経験はさせてもらえるのではないかと推察されます。

次に、医学部の入試形態に性格(特性) が考慮されていることとは、医学部においてボランティア活動の履歴や性格的な要素が考慮されることは日本ではあまりないのではないかと思います。日本では推薦入試や AO などの特殊形態をもつ入試を除き、一般入試においてボランティア活動をたくさんした者が受かるといのは聞いたことがないと思います。また、性格的な要素で不合格にするのも日本では現実的にはあまりないと思います。ハワイ(アメリカ)ではこの点は重視されているように思われます。

最後に自分の反省点として

英語の勉強が不十分であったこと

循環器の勉強が不十分であったこと

PBL 実習に関してあまり積極的に出られなかったこと

上の二つにより PBL 実習はほかの学生より学習効果が低くなってしまい、せっかくこのような場を用意していただいた先生方に対し申し訳なく思います。これからは普段の勉強に英語を混ぜていくこと、多面的なものの見方をすることに心がけて生きていと思っています。

今回このような場を用意していただきありがとうございました。この経験および佐賀大学での過去、未来においてより深く研鑽し、築く知識・技術を佐賀県の皆様に少しでも還元することができ、お役に立てるよう残りの学生生活を有意義なものにしていきたいと思っています。

ハワイ大学 2014 Summer Medical Education

Institute Student Workshop 報告書 # 3

この度、8月3日～9日にハワイ大学 JABSOM で行われた臨床推論ワークショップに参加させていただきましたのでご報告致します。

このワークショップは、ハワイ大学の学生との PBL を通して臨床推論能力を身につけること、診察の流れや基本的な手技を学び、英語で模擬患者の診察ができるようになること、英語のスキルやコミュニケーション能力を高めること等を目的として開かれているもので、全国の様々な大学から 30 名の医学生が参加していました。具体的な内容は、PBL（ハワイ大学の学生をチューターとして 2 例の症例検討を行いました）・胸部診察（肺・心臓）の実習及び模擬患者体験・Clinical Skill の実習（注射）・ハワイ大学の学生との文化交流・禁煙指導や日本とアメリカの医学教育の違いについての講義等でした。いずれも 3 年生ではなかなか経験することのできない貴重なもので、沢山のことを吸収でき毎日がとても充実していました。

2 日間にわたり行われた PBL では、①症例検討②与えられたテーマについてのレジюме作成③グループ発表という一連の流れをダイジェストで体験しました。各グループにはハワイ大学の学生が付き、司会進行や分からない単語の説明をしてくれました。彼らとの PBL の中で感じたのは、彼らは意見の理由づけをとても重要視しているということ、そして PBL を勉強の動機づけとして楽しみながら行っているということでした。全てのことを PBL で学習するというだけあって、形式はほぼ同じでも取り組みの意識が日本の学生よりもとても高いと感じました。症例の内容にはまだ習っていない範囲も多く含まれており、3 年生の私にはとても難しいものでしたが、その分同じグループの他の学生から受ける刺激はとても大きかったです。今後の PBL への取り組み方を見直すよききっかけとなり、PBL による学習が主体となる 3・4 年のうちに参加することができて良かったと思いました。

模擬患者体験・注射の実習は、日本で体験したことがなかったため臨むにあたりとても緊張しましたが、実際に行ってみると意外と落ち着いて取り組むことができました。どちらとも事前に受けた講義が実習に活かしていることを実感し、新しい体験でもきちんと準備すれば過度に心配することはないのだと学びました。

ワークショップで受けた講義は、医師の患者との適切なコミュニケーションの取り方についてのものが多く、その中で日本人の参加者同士、あるいはハワイ大学の学生も含めて Communication Practice をする機会もありました。どの講義も英語や患者への言葉のかけ方、働きかけの方法等の良い練習になりました。禁煙指導の練習の中で、ハワイ大学の学生が、実際の患者に対して禁煙指導を行ったことがあると話してくれた時はとても驚きました。ハワイ大学では 1 年生の時から患者と様々な形でコミュニケーションをとる機会が

多くあるのだそうです。私も実習の中で入院患者の方とお話をする機会は今までにもありましたが、実践的なコミュニケーションの練習は今回が初めてだったので、日本から参加されていた先輩方やハワイ大学の学生から多くのことを学びました。

このように、今回のワークショップでは全ての体験が私にとってとても新鮮で、様々なことを学習する機会、自分の今までの勉強の仕方への良いフィードバックになりました。特にワークショップに参加されていた先輩方からは大きな刺激を受けました。先輩方は医学の知識が豊富な上に医学英語も積極的に勉強されており、PBLやディスカッションにも主体的に参加されていました。その姿を見て、私もこれからもっと勉強して、どのような環境でもしっかりと自分の専門性を発揮できるような医師になりたいと強く思いました。さらに、ワークショップ以外でも、7月に交換留学生として佐賀大学に来ていた学生を中心に、ハワイ大学の学生が色々なところを観光案内してくれたり、夜ご飯に誘ってくれたりと一緒に話す機会をたくさん作ってくれました。そのおかげで、お互いをよりよく知ることができただけでなく、学習への取り組み方や将来どのようにして働きたいかなどについて医学生同士話し合うこともできとても勉強になりました。ハワイ大学の学生は皆優しく勉強熱心な人ばかりで、彼らと将来同じフィールドで働けるかもしれないと思うと、自分の将来に対して大きな希望が持てる気がしました。今回できたつながりは是非今後も大切にしていきたいです。

最後になりますが、今回このような素晴らしい機会を与えていただいたこと、またワークショップ参加にあたり同窓会より海外研修奨学金をいただいたことに心より感謝申し上げます。この経験を生かして、将来は今まで支えてくださった方々に恩返しができるような医師になれるよう、日々の学習に励みたいと思います。本当にありがとうございました。

ハワイ大学 2014 Summer Medical Education

Institute Student Workshop 報告書 # 4

今回私は、8月にハワイ大学で行われた Summer Medical Education Institute というワークショップに参加させていただきました。参加に際して奨学金等のサポートをして下さった方々への感謝の気持ちとともに、このワークショップで経験してきたことについて報告させていただきたいと思います。

ハワイに到着してから日本に帰国するまでハワイ大学の学生によるサポートもあり、とても充実した日々を過ごすことができました。ワークショップ最終日はハリケーンが近づいていたため中止になってしまいましたが、PBL (Problem-Based Learning) を始め、身体検査の手技についての学習や患者役と医師役に分かれた Communication Practice、模擬患者さんとの医療面接など毎日全てのプログラムが英語で行われるため、ハワイ大学の医学生の学習形式をより身近に経験することができました。このワークショップに参加して、特に印象に残っているものについて写真を含めいくつかあげていきたいと思います。

*PBL

ある症例について5、6人の学生とチューターの先生を含む少人数のグループでディスカッションをしながら学ぶ学習形式で、今回はハワイ大学の学生がチューター役となって行われました。1番目のステップでは、シナリオを読んで患者に関する Fact(事実)、考えられる鑑別疾患など Hypothesis(仮説)をあげ、疾患を絞り込むのに必要なこと (Need to know)、疑問点や不確かなことを Learning Issue としてあげていきます。次のステップは Learning Issue として上がった項目をメンバーで分担してそれぞれが調べ、最後のステップで発表することによりグループ内で共有します。佐賀大学でも3年生と4年生でPBLは行われますが、ハワイ大学では1年生から行われているそうです。また自己学習に必要な医学書などの高価なテキストを各自で購入しなくても、大学のパソコンで閲覧することができるため、すべての学生が平等に学習できるとともに、学習の効率も上がりとても良い制度だと感じました。

*Physical Examination Skills and Lecture

身体検査の行い方について、講義の後にペアを組んで交互に医師・患者役となって行う実習や、心雑音を聞く実習がありました。模擬患者さんとの医療面接では、限られた時間内に問診と聴診を行わなければなりません。そのため患者さんの主訴や問診中に得られた情報から、病態を絞り込むためには何が必要かを考えながら重要なことを優先的に聞き出していく良い練習になりました。病態を個別に学習するのではなく、ある患者さんを通して

その病気に合併しやすい症状や関連する生活環境を含め同時に学習するのは、実際の診察様式と似ていて、とても理解しやすく身に付きやすい方法だと思いました。

*** Injection clinic**

この実習では筋肉内注射と皮下注射、皮内注射を行いました。実際に注射を自分が打つのは今回が初めてだったため、最初はとても緊張し不安でしたが、一度終わるとどの程度の速さでどのくらい針を入れればよいのかが分かり、今の段階で経験することができて良かったと思えるような実習でした。

*** Communication Practice with JABSOM students**

ハワイ大学の学生が患者役となり、医師としてどのようなアプローチで禁煙のサポートをするのか、治療に使われる薬を含め説明の仕方や患者さんの相談に対する対応の仕方をコミュニケーションの中で実践的に学びました。患者自身が禁煙に積極的でない場合には喫煙による様々な害について説明し十分理解してもらうこと、そして本人が禁煙したいと思うようになったらその意思を家族や友人など周りの人にも話し、協力してもらうことが大切だということが分かりました。

*** After this workshop**

私はこのワークショップを終えて多くのことを経験することができました。ハワイ大の大学生やこの研修で出会った他大学の学生との交流で今回の経験がより充実したものになったとともに、今後も同じ道を目指す仲間として高め合える存在でありたいと思います。そして将来この研修への参加を支えて下さった佐賀県の医療に貢献できるような医師を目指していきたいと思います。